

放送100年、エルリ5年

先にも書いたことがあります。2019年に病気になって以後の楽しみの一つは散歩しながらラジオを聞くことです。ラジオは情報源としても、エンターテインメントのツールとしても最高の機器であると思っています。私は SNS にはほとんど関心がありません（というより、内容をよく理解できていないので、駆使できない、というのが正直なところですが）ので、新聞、テレビとラジオが頼りの昭和人間です。最近のテレビは、一部を除くと、つまらない番組が多いのでラジオは最愛の友です。

今年は、ラジオ放送が始まってから100年目とのことですが、始まった1925年は戦前で残念ながら筆者もまだ生まれていませんでした。ただ、テレビが普及するまでの子供のころの楽しみは、もっぱらラジオを聴くことでした。音楽も、スポーツも文芸作品ももっぱらラジオで楽しむことが多かったようです。昼間や夕方の番組では、「新諸国物語」や「赤胴鈴之助」（吉永小百合が出演していた）、夜ともなれば、「ホシ（犯人）を探せ」を思い出します。ポール・アンカ、エルビス・プレスリーやボブ・ディランを聞いたのもラジオだったのではないのでしょうか？そうそう、旺文社の「大学受験講座」（民放、文化放送？）もあって、オープニングにブラームスの「大学祝典序曲」が流れていました。「100万人の英語」という番組（民放）では、「赤尾の豆単」（「正式名は赤尾好夫著「英語基本単語集」、旺文社）というものがあって、8000語覚えたらどこでも入学できる、と鼓舞されたことも思い出します。今、NHKの「100年ラジオ」という番組を散歩の途中で聞いていますが、あんなことがあった、こんなこともあったと思いたすことばかりです。

ご承知と思いますが、100年前の1925年にラジオ放送を提案したのは、後藤新平（東京放送局初代総裁）だったとのこと。彼の専門は医学なのに、土木技術とも関連が深い方でした。なかでも、関東大震災後の帝都復活に貢献したのは偉業として語り継がれ、大災害時代の現代においてその手法が見直されています（越澤明著：後藤新平—大震災と帝都復活、ちくま新書、2011）。

出発当初は文明の利器だったラジオですが、便利なものにはその反面に隠れた弱点もあることは、歴史が証明していますし、今、^{はや}流行の SNS を見ても自明です。そのことは、高橋源一郎著「ラジオの、光と闇—高橋源一郎の飛ぶ教室2」（岩波新書、2025）でも言及されています。ここで言う「闇」の典型は、プロパガンダです。日本も、ラジオを含めたメディアが政治的プロパガンダに利用された苦い経験を有していますが、上記図書にも深刻な事例が紹介されています。メディアリテラシーの重要性が叫ばれる所以がここにあります。

“放送 100 年”には比べるべくもないですが、LRRi は令和 7 年 7 月 1 日で創設 6 年目を迎えました。まだ先が十分見通せませんが、過去の 5 年間で、各種講座、受託業務、書籍出版等を通じて、細やか乍ら、継続教育支援や社会貢献ができてきたものと考えております。とりわけ、業務を通じて、自然災害低減と気候変動対応を通じた地域社会の強靱化への貢献を心掛けてまいりました。なかでも、気候変動対応分野では、緩和策より適応策が重要で、今後は、“適応ビジネス”が世界のビジネスの中心事業の一つになるとの推測のもとに、革新的な適応策の方向性を探っているところです。詳しくは、「LRRi 技術資料」(Vol. 3)と下記の経産省資料をご参考にしていただきたいと思います。



(a) 適応ビジネスが期待される分野 (b) 予想される適応ビジネスの市場規模

図 気候変動適応ビジネス (経済産業省「企業のための温暖化適応ビジネス入門」, 平成 30 年 2 月, https://www.meti.go.jp/policy/energy_environment/global_warming/pdf/JCM_FS/Adaptation_business_guidebook.pdf, 一部著者加筆)

この図における適応策の分野は経済産業省独自のもので A-PLAT (<https://adaptation-platform.nies.go.jp/>) で示されている適応分野と分類が異なっていることに留意しておく必要があります。

ともあれ、皆様との力強い連携を通じて、気候変動適応ビジネスに繋がる LRRi 発の“シナジー技術”あるいは“多機能技術”を世に問うことができることを念じて、年度初めのメッセージとさせていただきます。

来た道に 悔いはなしとは 言いけれど

思い出話 繰り返しおり

(令和 7 年 7 月 1 日, 代表理事 安原一哉)